

令和 2年 2月 10日

学位論文審査並びに最終試験結果報告書

大学院看護福祉学研究科長 殿

主査 山田 律子

副査 上野 昌江

副査 西 基

副査 三国 久美



このたび 岡田 尚美 にかかわる学位論文審査並びに最終試験を行い下記の結果を得たので報告する。

記

1 学位論文題目 継続的な支援が必要な家族に関わる助産師のための保健師との連携指標の開発

2 論文要旨 すでに配布のとおり

3 学位論文審査の要旨

適切な養育が困難な妊産褥婦を含む家族に対しては継続的支援が不可欠であり、助産師と保健師との円滑な連携が必要である。このことから本研究では、妊娠期から療育期における継続的な支援が必要な家族に関わる助産師のための保健師との連携指標を開発することを目的とした。

研究方法では、consensus methods の一つであるデルファイ法を用いて3段階5ステップを踏み、専門家会議によって作成した項目を、全国調査によって各項目の同意率が80%以上のコンセンサスが得られるまで調査を繰り返して連携指標を開発するなど、周到な計画のもとに本研究が遂行されていた。本研究で開発された連携指標の使用に際しては、項目中に「緊急性が高い」「必要がある場合」などの抽象度の高い表現が含まれるため注釈をつけるなどの工夫が必要であるものの、これまで助産師用に保健師との連携プロセスに沿って開発された指標はなく、先駆的であり、かつ独自性の高い、実践に貢献する研究であると、本研究を高く評価した。

本審査委員会では、総合的に判断して、本論文は博士論文としての水準を有していると判断し、博士の学位を授与するに値するとの結論を得た。

4 最終試験の要旨

審査は、プレゼンテーション、質疑応答、博士論文審査基準による評価、審議の各プロセスを経て行われた。プレゼンテーションは、内容が明確に伝わるものであった。また、審査委員からの質疑に対する申請者の応答は、極めて的を射たものであった。特に審議では、本研究の発展に向けての地域におけるシステムの整備や、実施率が低かった項目を対象者の経験年数で解析することにより、教育においても本研究結果の使用が有用となることなどの意見が出された。これらの意見は、本研究の今後のさらなる発展が期待されることの証左であるとも考えられる。

審査の結果、本学位論文が新規性と独創性に富み、看護学とその関連分野の発展に大きく寄与する優れた価値を有することを全審査委員が一致して認めた。

以上の結果 岡田 尚美 は、

博士(看護学)

博士(臨床福祉学)

の学位を授与する資格が

ある

ない

と判定する。